

interview with
**YOSHIZUMI
ISHIHARA**

——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

自然への畏怖の心を忘れず、謙虚に受け止めることが必要

——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

生まれ育った湘南で、幼い頃から空に浮かぶ雲を眺めるのが好きだったという石原良純さん。お天気好きが高じて、超難関の気象予報士試験に挑戦し、1997年に見事に合格。以来、ニュース番組などの親しみやすい天気解説が好評を博している。

近年は、ゲリラ豪雨や爆弾低気圧、竜巻などによる災害が多発していることから、その原因や対策について、気象予報士として意見や解説を求められることが増えているという。

今後ますます気候変動が深刻化する予見がある中で、「想像を超えるような災害がどこで起こってもおかしくない」ということを認識し、命を守るための防災意識を高めてほしい」と注意を呼び掛ける。

——自然への畏怖の心を忘れず、謙虚に受け止めることが必要

石原良純

「巻頭インタビュー」
高い防災意識が、命を救う

局地的な大雨や豪雪、竜巻など、これまでに経験したことのないような自然の脅威にさらされることが多い昨今だが、災害から命を守るために、どんな心構えを持つべきだろうか。気象予報士の石原良純さんに、気候変動の現状と私たちが取るべき行動や備えについて伺った。

★以外の写真＝吉澤咲子 取材・文＝宇治有美子



——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

自然への畏怖の心を忘れず、謙虚に受け止めることが必要

——近年、異常気象が顕著に増えているのを感じます。ただ都会に暮らしていると、雨や風が命にかかわるということがピンとこない人も多いようです。

生まれ育った湘南で、幼い頃から空に浮かぶ雲を眺めるのが好きだったという石原良純さん。お天気好きが高じて、超難関の気象予報士試験に挑戦し、1997年に見事に合格。以来、ニュース番組などの親しみやすい天気解説が好評を博している。

近年は、ゲリラ豪雨や爆弾低気圧、竜巻などによる災害が多発していることから、その原因や対策について、気象予報士として意見や解説を求められることが増えているという。

今後ますます気候変動が深刻化する予見がある中で、「想像を超えるような災害がどこで起こってもおかしくない」ということを認識し、命を守るための防災意識を高めてほしい」と注意を呼び掛ける。

——自然への畏怖の心を忘れず、謙虚に受け止めることが必要

石原 それは、とても危険なことです。例えば1959年(昭和34年)の伊勢湾台風で約5000人の方が亡くなりました。元来、日本は気象災害に見舞われやすい風土であるため、かつては雨風で命を落とす人が多かったのです。それを克服するために気象観測、予報、情報伝達、さらには土木技術まで、全ての分野で研究、対策が進み、随分と平穏に暮らせるようになりました。

——今後、日本でもさらに災害が増えるということでしょうか？

今年9月に報告された国連の『気候変動に関する政府間パネル(IPCC)』によると、十分な対策が行われなければ、今世紀末の世界の平均気温は1986〜2005年の平均値に比べて最大4.8℃も上がるのだそうです。これによって、世界中で熱波や豪雨が増える可能性が非常に高いと予想されます。

——今後、日本でもさらに災害が増えるということでしょうか？

——ニュースで「これまで経験したことがない雨」などと報道されるのをよく耳にします。いま、地球上では何が起きているのでしょうか。

石原 地球温暖化の影響で海水の温度が上がると、海面から大量の水が蒸発し、空気中の水分量が増えているのです。日本の都市は、1時間に50mmの雨を想定してま

空を見上げれば天気が分かる!?



積乱雲

夏空に浮かぶ積乱雲は白く輝いて見えるが、雲の底は黒く不気味に見える。急に冷たい風が吹いてきたら、積乱雲が近づいてきたサイン。激しい雨や雷に見舞われる恐れがある



巻雲

筆で絵の具を伸ばしたような模様の、すじ状の雲。すじ雲と呼ばれることもある。巻雲は空の高い位置でできるため、雲粒は氷の粒。高気圧に覆われたときによく現れるので、天気は比較的良好



巻積雲

白い碁石を敷き詰めたような雲で、いわし雲やうろこ雲とも称される。「秋空に浮かぶ巻積雲が好き」と石原さんも絶賛する美しい雲だが、この雲が現れると徐々に天気が崩れていく



災害は、1に自助、2に共助、3に公助。 まずは自分の身を守り、 その上で近隣の方々と 助け合うことも必要です

interview with
**YOSHIZUMI
ISHIHARA**

突風の数が増えているし、これまで大雨の被害がなかった地域での水害も多くなっています。気候変動による災害は、残念ながら今後も増えていくと考えられます。これからは、どこに暮らしているも従来の経験則では測りきれないような災害が起こり得るし、それによって命を落とす危険があることを一人ひとりが認識しなくてはなりません。

気候の変動によって起こる気象災害が避けられないいま、被害を最小限に食い止めるためには、日ごろから防災への意識を高めておくことが重要になる。

自分や家族の身を守るために近隣との共助が欠かせない

—— 私たちにはいま、気象災害に備えて、何ができるのでしょうか？

石原 100年に1度、1000年に1度の災害にどう備えるか？とても難しい問題です。僕にも明確な答えが見つかりません。

ただ、防災意識を高めるなど、自衛策を取ることが出来るはず

です。

僕は神奈川県出身ですが、1970年代ごろまでの神奈川県では、土砂災害が多かった。小さな土砂崩れがしょっちゅうあつて、私の家も門が半分埋まったことがあります。その対策として神奈川県は、地盤の緩い地域は地面をコンクリートで固めました。そのおかげで最近では、土砂災害はほとんど起こらなくなったのです。古くから住んでいる人はこう

した歴史を知っていますが、新しく移り住んできた人は自分の住むまちの成り立ちを知らない人が多い。もし知らなければ、どんな地質でできていて、どういった災害が起こりやすいかを、まずは「知ること」が防災の第一歩だと思います。

—— マンションや団地などの集合住宅が主催する防災訓練やイベントがありますが、そうした行事に積極的に参加するなど、日ごろから近隣の人々とコミュニケーションを取っておくことも大切でしょうか。

石原 そう思います。特に一人暮らしをしている人は、自分がそこで暮らしていることを誰かに知っておいてもらわないといけない。万が一、土砂災害で土に埋まってしまったとしても、存在を知らなければ、誰も助けようがありません。僕も一人暮らしをしていた頃は、毎朝近所の方に挨拶をするのはもちろん、意識的に近所の方々とコミュニケーションを取るようになっていましたよ。

災害は1に自助、2に共助、3に公助と言いますが、その割合は自助が5割で共助が4割、公助は1割ほどのようです。まず、自身の身を守る。その上で地域や近隣の人たちと連携することで、助かるケースがとて多いのです。

—— 石原さんは、家庭でどのような災害の備えをしていますか？

石原 食料と水、懐中電灯、非常用袋などを用意しています。また、伝言サービスや避難場所、昼と夜それぞれの避難経路など、非常時の行動についても家族間で

話し合っています。家族の身を守るためには人任せにはせず、自分たちで考えて行動することが大切です。

私たちが災害から身を守るためには、気候に関する正しい情報を得ることが欠かせない。石原さんをはじめとした気象予報士の活躍の場は、今後ますます広がります。

—— テレビなどの気象予報に関心を持つことも、災害から身を守ることに繋がるとは？

石原 昔の天気予報は、地図上に晴雨のマークを示すだけでしたが、その後レーダーなどの観測網が発達し、情報量も増えてきました。そんなとき、僕が師匠と仰ぐ気象予報士の森田正光さんは、視聴者の目線で生活に密着した情報を分かりやすく伝えようと、「洗濯指数」や「ビール指数」などを伝え始めたのです。僕も天気キャスターをするようになってからは、まず視聴者の方に天気予報に興味を持ってもらい、その延

長線上で防災意識を高めてもらえるようなプラスαの情報を伝えようと心掛けています。最近の天気予報はそんなふうに変わってきていますよ。

テレビやラジオのほか携帯電話話など、いまはさまざまな手段で情報を手に入れることができます。だから毎日、天気予報をチェックしてほしい。それと同時に、自分が住んでいる空を見上げることが大事です。

黒い雲が近づいて、ゴロゴロと雷の音が聞こえているのに、平気な顔で「天気予報では雨が降らないって言うたから大丈夫」とすましている人が意外と多くて、驚くことがあります。リアルな情報が入り頭上にあるのですから、天気予報と現実の空とを照らし合わせる習慣も一緒に身に付けてほしいと思います。

毎日空を見る習慣を付けたら気象の異変に敏感になる

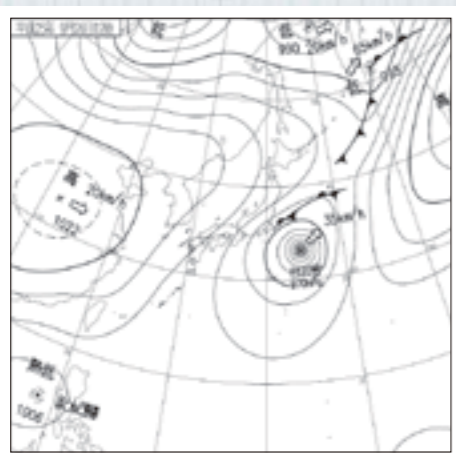
—— 専門的な知識がなくても、毎日空を見るようにすれば、危険を察知できるようになるのですか？

石原 綺麗な花にはトゲがあると云いますが、実は空も自然の一部だからでしょうか、綺麗に見えるときこそ、危険な兆候が潜んでいることが多い。いま雨が降っていないことも、突然冷たい風が吹いてきたり、変わった雲が近づいてきたり、変わった雲が近づいてきたら警戒が必要です。1年ぐらい毎日空を見上げてみると、天気図が読めなくても、そうした空の異変に気付くようになるものです。

—— 空を眺めることは、石原さんの最大の気分転換でもあるのか？

石原 海や山といった自然の中では、人は安らぎを感じますよね。実は、海より広く、山より高いものが、もっと身近にあるのです。そう、空です。空は一番身近な大自然だから、眺めるだけで人間を落ち着かせる力があるのだと思います。それに下を向くより、上を向いた方が、ぐんと視野や思考も広がります。「1日に1度は空を見上げましょう」。これは僕がとて大切にしてる言葉です。皆さんも、空を身近に感じてほしいですね。

取材当日は台風が関東に接近中でした！



画像提供: 気象庁

取材当日の天気図を熱心に見ていた石原さんが、「今日の空は、雲がとて綺麗なんです」と話し始めた。「『いつもの空とは少し様子が違う』と思ったら、やはり台風が近づいている。空は早くも異変を察知しているのです。頭上の空を眺めるだけで、1000km南の台風にまで思いをはせられるってすごいことですよ」。

自分の住むまちの空を見上げれば、空が知らせてくれるサインを受け取れるようになる。気象災害を回避することにもつながりそう。



取材当日の天気図について目を輝かせながら解説してくれる姿から「天気好き」の素顔がこぼれる